アジア研究所所報
ISSN　0385-0838
第 120 号
発行所
亜細亜大学アジア研究所
東京都武蔵野市境5-24-10
電話 0422（54）3111
郵便番号　180-8629

押しつけ憲法と戦後六十年

梶村　昇

はじめに

床屋で政治談義をする程度で、政治の専門家でもない者にとって、恰好な証言といえるエッセイに、先日お目にかかったのでご紹介したい。専門家の目から見れば陳腐な話かも知れないが、素人にはこういう分かりやすい、はっきりした話が欲しかった。

日本の今の憲法が、占領時代にアメリカから押しつけられたものであることは、誰でも聞き知っていることだが、それではそれを証明する文献を示せ、と言われると、おいそれとは出てこない。

これはアメリカ人が作ったものであるから、当の本人たちの証言でなければ、日本人がどう言おうと役に立たない。もちろん専門家は多くの材料をお持ちであろうが、英文の特殊なものは一般には通用し難い。

そこで「巷間言われているように」などと言って、お茶を濁しているが、本当ははっきりした証文が欲しい。この一文はそれを補って十分なものがあると思う。

それは平成十七年九月号の『文藝春秋』の冒頭の随筆欄に、ミルトン・エスマンというアメリカのコーネル大学名誉教授が書いた「『押しつけ憲法』と民主主義」というエッセイである。『文藝春秋』なので、大方の目に止まっているとは思うが、見逃した人もおられようかと思って紹介するまでである。

新憲法成立の経緯

エスマン教授は、その昔、ハーバード大学の付属機関、軍政研修学校で、日本の政治の仕組みを研究していたところ、ＧＨＱ民政局勤務を命じられ、一九四五年十月に日本に赴任したという。当時二十七歳であったというから、今年八十七歳の高齢で、その意味からも貴重な証言である。文章は簡潔で要を得ていて分かりやすい。まずこう記している。

民政局の責任者は、マッカーサー元帥の腹心、コートニー・ホイットニー准将で、私の直属の上司はチャールズ・ケーディス大佐だった。民政局は私のような軍政官と少数の民間人からなる小グループで、占領行政の運営

〈目　次〉

○押しつけ憲法と戦後六十年……梶村　昇…(1)
○「国際中堅企業」の登場（Ⅶ）……西澤　正樹…(4)
○台湾工業の近代化……安部　桂司…(6)
○中国と北朝鮮の経済関係（Ⅱ）……李　虎男…(10)
○『アジアの窓』中国のめざす「和諧社会」…小林　熙直…(12)

と、日本の政治制度の改革および再構築に必要な政策を提言する役割を担った。

と。これは大事な指摘で、マッカーサー元帥、ホイットニー准将、ケーディス大佐という縦の系列が、民政局の責任者であったということである。

（この）民政局が日本に残した最も大きな足跡は、やはり四六年の新憲法の起草である（私は行政権を担当する小委員会に加わった）。マッカーサー元帥の指令の下で、わずか九日間で極秘裏に起草され、保守的な幣原内閣の承認をなんとか取りつけて、微少な専門的修正を施しただけで、後に国会で制定された。

わが上司、ケーディス大佐こそ、このリベラルな憲法起草作業の中心的人物だった。大佐はルーズベルト大統領のニュー・ディール政策の主導者の一人であった。

というのである。

日本の憲法は、民政局がマッカーサー元帥の指令の下で、わずか九日間で、極秘裏に起草され、微少な修正を経て、後に国会で制定された。起草の中心的人物はケーディス大佐であったというのである。

例の憲法九条については、

ただし、戦争を放棄した憲法九条は、マッカーサー元帥がみずから口述したものだ。元帥は、日本国民の大半は軍部指導者に裏切られたと感じており、すでに過去の軍国主義と決別する心構えができている、と認識したのだった。

とある。

以上が日本の新憲法成立の経緯である。お互い、何度も聞いていることだが、それは又聞きの、又聞きで確証がなかったが、これは実際に憲法の作成に携わった人の証言であるから万鈞の重みがある。

憲法擁護論者は、憲法の成立には、日本の要路の意見が、相当採り入れられたようなことを言うが、これを見る限り、そのような余地は全くなかったことが分かる。

ところがエスマン教授は、続けてこう言っている。

しかし憲法の草案が極秘裏に、しかも日本人が一人も参加することなく準備されたことは釈然としなかった。だから私は、新憲法はおそらく占領が終わるまで持たないだろうと予測していた。

新憲法が外国の軍事政権によって起草され、日本国民に押し付けられた公文書であることは、誰の目にも明らかだったからである。

と。これを読んで私は顔の赤らむ思いがした。作った方は「占領が終わるまで持たないだろうと予測していた」というのに、押しつけられた方は、それから六十年も経っているのに、まだ変えるの、変えないのと、国を挙げて騒いでいるのであるから、〈日本人はなんとお人好しなのだろう〉と思ってしまう。

おそらくエスマン教授も〈日本人の頭脳構造はどうなっているのであろうか〉と思っているに違いない。そこで彼はこの後にこう述べている。

私の予測が間違っていたことは、時が証明している。日本人の大半は、外国人によって起草されたにもかかわらず、それを自分たちの新憲法として受容した（中略）。

それは、さまざまな階層の日本人が等しく示した民主主義への極めて高い関心である。

と。最後の二行は、そうとでも言わなくては、予測の間違った説明がつかないからであろうが、それにしても氏は、いろいろな意味で（良くも悪くも）、日本人には感心させられたのではないかと思う。最後にこう述べているのもその現れであろう。

以来私は、十数回にわたって訪日しているが、その都度、日本の人々が戦後達成したダイナミズムと富、そして高い生活水準に驚嘆させられる。そして今私は、こう自問している―降伏とアメリカの日本占領は、現代日本の国家的性格の形成に、いったいどの程度貢献したのだろうか、と。

これでエッセイは終わりであるが、実際、日本の新憲法制定に携わった一人の証言であるから、これから憲法改正の論議をしようとしている日本にとって、有り難い情報公開であったと思う。これで成立の経緯がはっきりしたのであるから、これを前提として、憲法論議をしていただきたい。

戦後六十年

以上で紹介したいことは終わったのであるが、私はエスマン教授より七歳年下で、ほぼ同時代を生きてきたので、氏の最後の「自問」の参考になればと思い、日本人の目から見た戦後の六十年を回顧してみたい。

まず日本に与えられた絶対的条件は、「降伏」によって、狭い領土と少ない資源とに限定され、その中で世界に伍して生きていかなければならなくなったということである。

それにはどうすればよいかということで意見が分かれようが、私は「科学と根性」だと思っている。根性を振りしぼって、他国の追随を許さないほど科学を振興すること、それが日本の生きていく道だと思っている。

氏が驚嘆した「日本の人々が戦後達成したダイナミズムと富」というのも、つまるところ科学と根性の成果であろう。トランジスタ・ラジオに始まって、半導体、自動車等々、他が追いつけば、その先を行く努力で世界の経済大国になっていった。ＮＨＫの「プロジェクトＸ」が、その一端を物語っている。これを続けていくほかないと思う。

ところが少し経済的に潤ってくると「ゆとりの教育」などと言い出したが、途端に世間の反論を浴びて撤退を始めた。何も持たない日本が、「ゆとり」などと言っていれば、すぐ置いてきぼりを食うことを世間は体で感じ取っているのである。

観念に踊らされた行政など庶民は受け容れない。塾の方が楽しいと小学生が言っているのを聞いたことがないのだろうか。真剣さが心の張りを呼んでいるのである。戦後六十年、日本が一番失敗したのは教育であった。今日の世相の歪みがそれを物語っている。

なぜそうなったかは、エスマン教授には悪いが、「アメリカの日本占領」の置きみやげである。その原因は、思考法が違うのに押しつけてきたことにある。

アメリカは人工の国であるから、多種多様の人間を結びつけるのは規則しかない。規則は頭で考え出すもの、すなわち観念の所産であるから、観念が幅をきかす。

ところが日本は千数百年間に、おのずから出来上がってきた国であるから、国民を結びつけているのも、生活の中から自然に生まれてきた「しきたり」であって、規則ではない。

いずれも一長一短あって、どちらが全面的に良いとも悪いともいえないが、この相違を無視して押しつけようとすれば、必ずそこに齟齬をきたす。

以前、私はこの紙上で「変えることのできるものと、できないもの」（一一五号）という小論を述べた。それは、あなたの三つ子の魂が変えられないように、民族にも、民族の三つ子の魂があって、それは変えられないものなのだということであった。

改めて日本民族の三つ子の魂をみれば、そこには変えられないものとして、家の存在と祖先崇拝信仰とがある。

それをアメリカの占領政策は変えようとした。それに大きな影響を及ぼしたのは、エスマン教授の上司ケーディス大佐であったと思う。彼はニュー・ディール政策の主導者であったことからも分かるように、リベラルというより、社会主義的思想の持ち主であった。

それに乗じたのが日本の進歩的文化人たちで、教育界にも多くの講師を派遣して、日本の伝統を抹殺しにかかった。象徴的にいえば、教科書を墨で塗り、小学校の校庭から二宮金次郎の像を取り払ったことなどである。

柴刈り縄ない草鞋を作り、親の手をすけ、弟を世話し、兄弟仲良く孝行尽くす。手本は二宮金次郎。

の歌のどこが悪いというのか。そして今頃になって、親殺しや子殺しを嘆いている。

どこの国にも民族の三つ子の魂がある。それを一律にアメリカのようにさせようとするのは無理である。戦後の日本がうまくいったからといって、イラクも同じようになると思ったら大間違いである。

個人も民族も国家も、三角の魂は三角のまま、丸くなるほかない。全部が同じ形になることもないし、そうしようと考えたりしてはならない。

（かじむらのぼる・本学名誉教授）